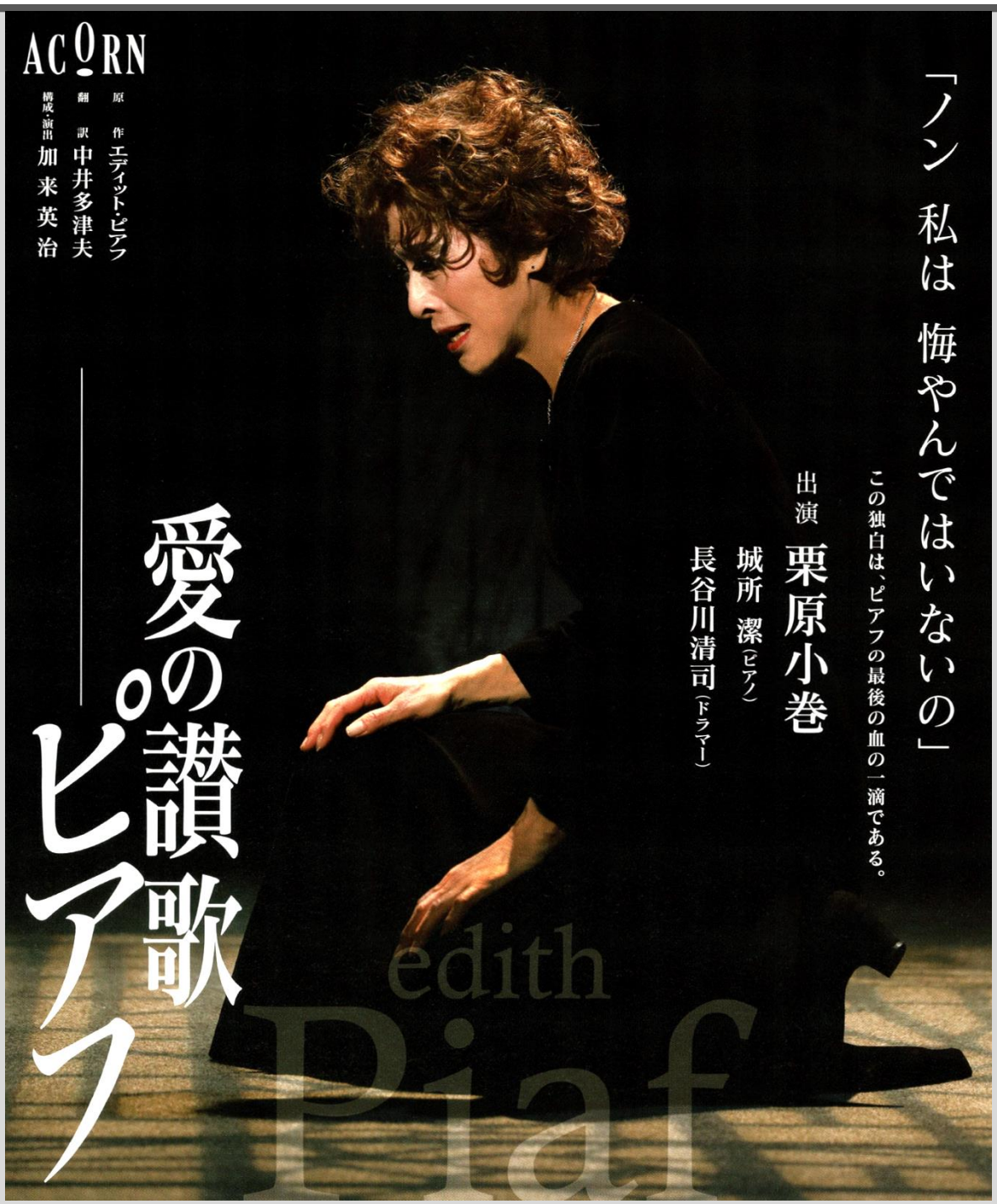
富士山演劇鑑賞会

No.278　富士山演劇鑑賞会 会報



2月4日（土）　ロゼシアター 中ホール

開場 18:00　開演 18:30

◇ 他団体の例会日程 ◇

静岡･清水	2月1日(水) 18：30	沼津・伊豆	1月31日(火) 15：30
(静岡市民文化会館)	2月2日(木) 13：00	(三島市民文化会館)	

他団体での観劇を希望される方は、事務局までご連絡ください。

愛の讃歌 ピアフ

ACORN

原作 エディット・ピアフ

翻訳 中井多津夫

構成・演出 加来英治

出演 栗原小巻

城所　潔（ピアノ）

長谷川清司（ドラマー）

上演時間
1時間30分

喜びと苦悩、ピアフの人生は、美しい泥にまみれていた。
その純粋な魂が、人々の胸を打つ。
両親、祖母、恋人、友人、歌、舞台、絶望、復活、そして真実の愛・・・。

ピアフの自叙伝（中井多津夫訳）をもとに、加来英治が構成した新作で、新しいピアフのドラマが誕生する。加来脚本はピアフの人生を八景に分け語りと歌で綴っていく。序景は死が近いことを自覚したピアフが、時間のある内に自分の真実を話しておきたいと語る場面である。「いいえ、私は、わが人生を何も後悔しない」

二景は幼いころの暮らしとプティ・ルイとの恋、二人の間に生まれた娘の死、その果ての破局が語られる。

三景はレモン・アッソーとの出会いである。彼はルプレ事件で絶望的になっていたピアフを助け、これまでの人生と別の人生があることを教えた。「私はもう一度、生きるために歌を歌った」。四景は「その人は私の人生に輝きを与え、死が二人をひき裂くことがなかったら、その人は私の人生を完全に変えていた」マルセル・セルダンとの恋である。しかしセルダンは死んでしまった。その後、彼の妻から電報が届き、ピアフはカサブランカに行く。二人はしっかり抱き合ったまま泣き出し、ピアフはこういう。「もし私を必要とするようなことがあったらいつでも呼んでちょうだい」ピアフはセルダンの息子の世話をすることになった。

五景は四年間にわたる麻薬との闘いである。禁断症状に苦しみ自殺まで考えたピアフの心に突然亡き母の姿が浮かびあがる。自分を捨て、十五年後に再会したものの麻薬に溺れ、孤独のまま死んでいった母。ピアフはそんな母の幻影を見たことで救われ再び舞台に立つ。六景はピアフが見つけ育てあげた後輩たちの思い出が綴られていく。貧乏だが素晴らしい声を持っていたシャルル・アズナブール、当初は発声の難があったイブ・モンタン、そのイブのデビューの時の感慨、さらに子を捨てようとした少女を救った話。

七景は次々に訪れる不幸に耐えながら、勇気をもって再起した人生と、最後の恋人になったテオとの思い出。八景は莫大な金を稼ぎながら、すべてを他人のために使い果たしたことが語られる。ピアフはそれを「復讐しているのです」と言う。極貧の中に育ち、わずかな金がないため人間としての尊厳を傷つけられた過去に思いを馳せる。

数奇な運命に翻弄され数々の男たちとの恋に生きてきたピアフだが、それは「愛の真実」を求め続けてきたからだ。幼い時に愛を知らず、人間の醜さだけを見て育ったピアフにとって「愛の真実」は尊いものだった。自分への愛だけではない、弱い者、虐げられている者への愛、それをピアフは生命を賭けて求めづけたのである。それが彼女の歌になり、時を経た今も国民的歌手してフランスの人々からそして世界から慕われる存在になった。

ピアフの人生を栗原小巻が演じ歌う。

（演劇評論家　水落　潔）

エディット・ピアフ(Édith Piaf, 1915/2/19 – 1963/10/10)は、フランスのシャンソン歌手。

フランスで最も愛されている歌手の一人であり、国民的象徴であった。彼女の音楽は、傷心的な声を伴った痛切なバラードが印象的で、その悲劇的な生涯を反映しているものが広く知られているが、実は、芝居仕立ての歌や軽快な曲なども歌っておりレパートリーは幅広い。有名な曲としては「ばら色の人生 La vie en rose」（1946年）、「愛の讃歌 Hymne à l'amour」（1950年）、「ミロール Milord」（1959年）、「水に流して Non, je ne regrette rien」（1960年）などがある。　Wikipediaより

栗原小巻　Kurihara Komaki

1963年、東京バレエ学校卒業。劇団俳優座俳優養成所在籍中抜擢され、NHK『虹の設計』等に出演。'67年、NHK大河ドラマ『三姉妹』お雪で、脚光を浴び、その年、日本映画製作者協会新人賞を受賞。 '68年には、『三人家族』『みつめいたり』『風林火山』で、日本放送作家協会賞、第一回テレビ大賞優秀タレント賞に選ばれる。 '72年には『忍ぶ川』（毎日映画コンクール主演女優賞、ゴールデンアロー賞映画賞、エールフランス女優賞を受賞） 1995年『欲望という名の電車』ブランチよりエイコーンを中心に演劇活動。現在に到る。

ピアノ演奏　城所 潔　Kidokoro Kiyoshi

（日本シャンソン・カンツォーネ振興協会理事長）

数多くのミュージカル、演劇の音楽監督を手がけ、自らのバンド「サウンドフォーカス」を結成。
作曲、編曲、指揮、ピアニストとして幅広く活躍。『越路吹雪物語』等、作品多数。
共演したアーティスト、岸洋子、上月晃、倍賞千恵子、ロス・インディオス、菅原洋一、市村正親、他多数。鳳蘭のステージ音楽監督、ピアノ演奏を 35 年間務める。

ドラマー　長谷川清司　Hasegawa Kiyoshi

ダン・池田とニューブリードを経て、1980 年フリーランサーとなる。レコーディング総数は 4000 曲を超える。NHK などの TV 番組 20 本のレギュラーを 26 年間勤め、伴奏した歌手は述べ 4000 人を超える。佐渡裕指揮「題名のない音楽会」や「ミュージックフェア」等出演多数。森山良子を 18 年間サポートし、1992 年、セビリア万博に出演。

翻訳者 中井多津夫氏への敬意と感謝（リスペクト）

1930 年に生まれた中井多津夫氏は、2013 年、10 月 11 日に、亡くなった。10 月 11 日は、ピアフの命日でもある。ピアフの眠る地に、散骨してほしい、中井の希望を一部ではあるが妻は叶えた。この話を聞き、中井多津夫のピアフへの情熱に胸をうたれた。このたびの公演は、妻・悠紀子さんの、承諾を得て実現した。身の引き締まる思いである。

エディット・ピアフ自伝の訳者あとがきには、次のように書かれている。

ピアフは、本書の完結とほとんど同時にその生涯を終えた。

ピアフの葬儀に群衆が殺到。

『ル・モンド』は、本書を絶賛。

ピアフの死後、17 年の時を経て、かつて、原本で読んだ、この書の翻訳を思い立ち、完成。

（パンフレットより抜粋）

『雉はじめて鳴く』感想

最初から最後まで息つく暇もなくて、あっという間でした。とても良かったです。感動しました。ありがとうございました。

ストーリーも良かったですし、現在、家庭・社会、いろんな問題が沢山ある中の一部。どこの世でも、やさしく包み込んでくれる人が周りにいてくれるだけで助けることも出来る。助け方もいろいろ考えさせられ、とてもいい勉強になり、とても良かった。感動しました。ありがとうございました。

人間関係が難しい所があったけれど、とても良かったです。クライマックスに至る迄の道のりに苦労があったように思いました。重量のある劇でした。

人の心の奥底に生きている「孤独」。廻りの人に見えぬこいつと斗う苦しさ。支える事が他人に出来るものなのか？

俳優さん達の熱演、本当に素晴らしかった。良いお芝居ですね。

学校現場にこんな深刻な事態があったとしたならば、どう対処したらよいか。本当にむずかしい問題だ。現実にもありうる事なんだろうな。

迫力ある演劇を見せていただきました。

装置が高低差があって、動いて、いろいろなシーンになって、おもしろかったです。熱演に感動しました。

舞台装置がとても良かった。内容も深く胸に迫りました。

現在の問題を取り上げて頂き、とても良かったです。考えさせられ、最後のシーンはとても心温まるシーンでした。

演技・脚本・舞台転換・照明、すべてがすばらしかった。良い芝居です！なのにぞわぞわすっきりしない。妙にリアル過ぎる台詞と30年後のハグに気持ちがついていけないのか……？つまらないどころか、こんなに集中したすばらしい時間である一方で、心の居場所がわからない……長年観ていても初めての感覚でした。

なかなか複雑な気持ちです。人がわかり合うのはむずかしいと思いました。心の中に誰も闇や弱いところを囲んで生きているのですね。主人公に青年が支援してくれる大人と出会え、生き抜くことができたことが救いです。

最後まで、車椅子の女性とその介護するのは父親だと思っていましたら、最後の会話でやっと理解しました。ようやく平和な日々がきたのかな？良かったです。

いつも楽しみにしています。時に笑いある内容で良かったです。先生と生徒の関係だけど、親みたいに寄りそってくれる所に感動しました。

舞台の装置が初めて見て、良かったです。時間があっという間でした。現代の親子や学校との関係もよくとらえていた様に思いました。

よくここまで現代の問題点に切り込んでくれたなあと思います。あんな教師、あんな親、不倫相手、いますよね。闇は深い。演じた人達も上手でした。

今の世の中の問題点をついていて、すばらしいと思います。家庭が安心して暮らせない子に、学校の先生でも誰でもいい、避難場所になってくれる人がいれば救われると思います。

今に時代に多々聞かれる問題を鋭くとらえていて、胸にしみる場面が多く、とても良い芝居でした。母親としてヒステリックに子供を叱っていた自分を気づかされました。

素晴らしい。考えさせられました。装置の使い方、上手い。時間の変化も。

とても良かったです。考えさせられました。子供を大切にしたいと思います。人の力って、人を助けるのはむずかしいなと思いました。

生きるという事は大変な事だと思う。30年も時間がかかるというのも無理だと思う。

ストーリー、演出すてきでした。人の心と心のつながりと、それをめぐる周り、体面、立場などについて考えさせられました。ケンの母親役、熱演でした。

始めの場面で、「おや、まあ」と、ちょっと下世話な芝居なら“イヤだな”と思いましたが、休憩なしで舞台転換が早く、引き込まれて観ていました。ほぼ一番後ろ位の席でしたが、セリフは聞こえました。あの装置、役者さんは大変ですね。終盤、二人の関係がわかり、してやられた感あり。

ケンくん、自殺しなくて良かった。リアルな学校の様子、こわかったです。

とても考えさせられました。良い舞台でした。

声の小さい人がいるので、言葉がわかりませんでした。もう少し声を大きく！

むずかしいテーマでした。

運営担当の声感想

休憩なしの上演2時間は劇団員の熱演に見入ってしまいました。時々の教頭の駄洒落には思わず笑ってしまい、その場も和みました。現在の学校における諸問題を取り上げた作品は、子育てを卒業した私より、渦中の娘世代の人達に鑑賞して欲しいと強く思いました。回転する舞台を上手に使い、テンポの速さや場面の切り替えの歯切れが良かったと思います。我が家の屋敷畑に3年前からつ

がいの雉が訪れるようになりました。来春もケーンと鳴く声を聞くのが楽しみです。　(Dembo)

座席は7列目でしたので、比較的顔もよく見え声も聞こえましたが、時々声が聞き取りにくいこともありました。回り舞台で、照明をセリフを言う人達に当て、出番でない人達は舞台に残ったまま暗がりにいるのが印象的でした。

時々、後方に車椅子の女性と介護の男性が出てきましたが、最初はよくわからず最後は浦川先生と健だったのかとわかった時、結局、回想場面をずっとやっていたのかと思い、自分の理解のなさが情けなくなりました。先生と生徒の関係を思い、何か昔の学校時代を思い出すような懐かしい感じがしました。　(希望)

人は周りの人とのいろいろな関わりの中で生きている。同じ相手との関係も状況によって変わってくる。高校生の健が担任の浦川先生に対する思いも、淡い恋のようでもあるし、母性を求めているようでもあるし、居心地の良い場所を求めているようでもある。担任の浦川先生についても違った側面で同じことが言える。

回転する舞台と効果的な照明で、場面の変化をうまく表わしていたが、休憩なしなのでとにかく疲れた。でも、時間が経つにつれて、その疲れは心地よいものになっていった。　(吉原工業)

心の中に色々な悩みをかかえている高校生を中心に信頼できる先生方との関係、母親とのすれ違いな生活、難しく私達も改めて考えさせられました。車椅子の方が先生、寄り添い隣にいる方が高校生だとは、最後までわからなかったのは私だけだったでしょうか。雉はじめて鳴くの意味もわかりました。楽しい時間をありがとうございました。　(丸啓)

あのシーンについて、「車椅子の女性が舞原の母親かと思った」「静岡に行っている父親とその母親(舞原の祖母)だと思った」「高いところで車椅子を動かしているので、ハラハラした」など、サークル仲間はいろいろ気になったようです。『ハグ』については、36歳高校の国語教師の娘に話したら「コンプライアンス違反、ありえない！」とのこと。教頭に対しては、『セクハラですよ』と注意する人がねえ……」と。ドラマですから、といえばそれまでですが。「母親の書いている手紙で静岡の住所を覚えていた、など細部のリアリティの無さが全体に影響してしまう」という人や、「高校演劇っぽかった」という人もいました。いろいろ突込みのはいるところも演劇鑑賞会の良いところだと思います。ひとりで観たら、そういう意見を言い合えませんものね。　(こぶ茶の会)

私自身、公立高校で40年間働いている身なので、とても興味深く見ることができた。学校現場という複雑怪奇な空間を、複雑なまま描いている点は、脚本家の目の鋭さを感じた。特に舞原健の母杏子の演技には鬼気迫るものを感じた。一方で、管理職である校長と教頭は、自分の出会ってきた管理職とはかなり差があって、リアリティーを感じなかった。

最後の場面でかっての高校生舞原健と担任だった浦川先生の再会には一瞬驚いた。しかし、よく考えれば、けっこうリアリティーがある展開かもしれないと思ったし、脚本家が現場の教師に対して、温かい目を持って描いていると感じうれしくなった。

休憩なしで2時間以上の劇を短く感じさせる役者の演技力や、回り舞台を使った場面転換の巧みさには拍手を贈りたい。　(吉原工業サークル)

運営サークル活動に参加して

物販係を担いました。扱っている品物をもっとアピールする手だてが必要かと思いました。知り合いでもなければ、スルーしてしまう方が多く、ただただ大きな声で呼びかけ続けましたが、「売れる工夫」をするとしないでは……言わずもがですね。　(吉原工業)

今回の運営サークル会議に1回目2回目は他の用事のため、欠席してしまい申し訳ありませんでした。3回目から出席し、皆さんとの話し合いや、相関図の作成など行いました。みんなとやる作業も面倒なようでもやりだすと楽しい気持ちになりると思いました。例会当日、受付担当でしたので、資料渡しであわただしかったですが、会員の方の顔が見え、親しみを感じました。

クリア活動も、毎回ポスターを家の前に貼ったり、趣味の会などでパンフレットを渡したり、声かけしましたが、なかなか成果がでませんでした。今後も機会をみて行動したいと思います。　(希望)

今回は運営サークルの集まりにほとんど出られず、申し訳ありませんでした。

役割としては、搬入2名、受付2名を何とかこなしましたが、8人のメンバーのうち、一人は90代、3人は80代、あとは体調不良、ボランティア活動や市議会議員活動で多忙というあり様で、サークル代表の都合が悪い時、代わりの人を頼むのが難しいです。が、どのサークルも同様と思いますので、次回からまた頑張ります。　(こぶ茶の会)

『雉はじめて鳴く』　運営サークル活動のまとめ

『雉はじめて鳴く』は、10サークルと３未サークルで担当し、９月21日の第１回目から11月15日まで４回の集いを持ちました。

みんなで前例会クリアをして迎える喜びを、達成感はこの鑑賞会でしか味わえないと、そのために目標を持って頑張っていこうと確認しました。また、『雉はじめて鳴く』　？　聞き慣れない題名にどんなお芝居？と七十二節季のことを調べたり、作品内容についても深め合いました。

ただ今回皆さん忙しいのか日程が合わずに参加サークルがいつもより少なかったのが気がかりでしたが、２回目の目標提出時に、早速入会があり、「前に会員だった方にもう一度どうか」と声掛けして実ったと。入会第１号をみんなで喜び合いました。それに続こうと、再入会の人へも声掛けをして結果に繋がりました。好調なスタートでしたが、そこからなかなか苦労しました。最終的に７名の入会でそのうち３サークル３名が担当サークルでした。

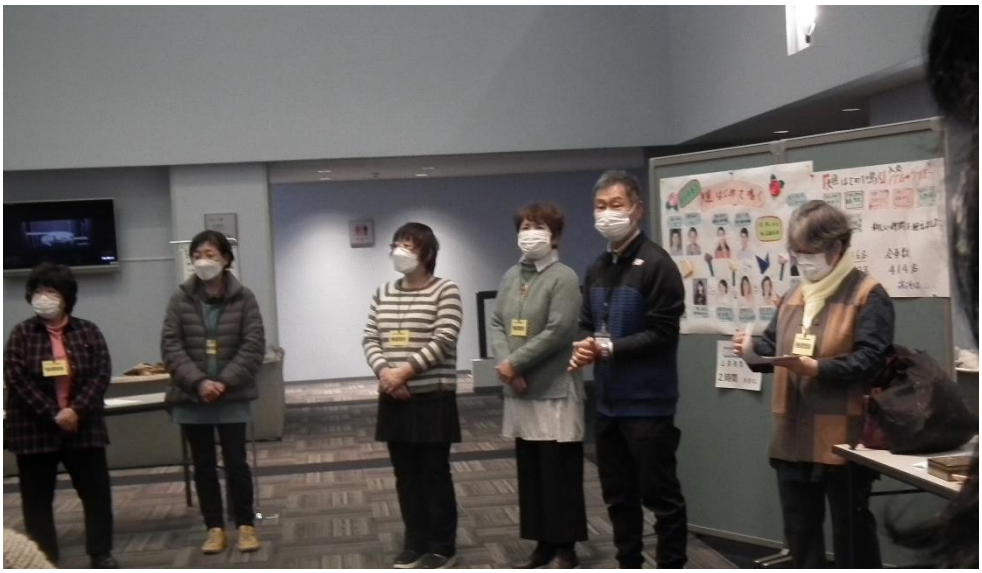
廻り舞台、照明、場面間のスピード感、洗練され斬新な舞台、車いすの男女はどういう関係？と気になり、「最後にしてやられた」という感想もありましたが、休憩なしの２時間の熱演に圧倒されました。

搬出では、スタッフのてきぱきとした指示に従って色々運び、最後の廻り舞台の仕組みを知ることができました。さすがにこの部分はスタッフの方が分解しパーツになった重い土台部分をみんなで運びました。

まとめの集いでは、語り尽くせないほど、言いたいことがいっぱいでした。それだけ作品に深みがあったこと、もっと多くの人に観てもらいたい作品で、クリアしたかった、などの意見がでました。

これからもリーフレットを活用して次につなげていこうと確認しました。

サークル数	63
サークル増	0
サークル減	0
±	−3
会員総数	414
入　会	7(1.7%)
退　会	16(3.8%)
±	−9
例会参加率	84.30%



運営担当サークル	夏椿	スカパン	スカパン２	吉原工業	希望
	気楽生会	はまかぜ	丸啓	さくらんぼ	彩
Dembo	富士宮北高	S-1	同級生	アンジュ	こぶ茶の会

運営担当サークルの皆さんお疲れさまでした

次 例 会 の お し ら せ

No.279 例 会　　2023年　3月 27日(月)

ロゼシアター中ホール　　開場 18:00　開演 18:30

東京芸術座公演

作　堀江安夫
演出　杉本孝司

出演
二瓶美江
手塚政雄
桶川人美
佐藤アズサ
星野子熊
若井なおみ
脇　秀平
小川拓郎
我妻美緒
吹田真美

上演時間
２時間１５分
休憩１５分を含む

いぐねの庭

2011年夏。
仙台市郊外の七郷と呼ばれる一帯の長喜城地区にある幸田家は、
大地震で半壊の指定を受け、半年も経ても殆ど手つかずの状態。
昼下がりの幸田家の茶の間に、座卓を挟んで向き合っているのは、
福永陶吾と妻の夏苗。夏苗の両親の幸田伸介と渓子、兄の伸也。
卓の上には一枚の書面。
木々の梢を震わす蝉時雨とは対照的に、地震の傷跡も生々しい
室内は沈鬱な静寂が支配する。
何れの肩にも焦燥感と切迫感、そして疲労感が重く張り付いている。
長い沈黙に耐えかねたように話を切り出す。

重要なお知らせ

・会費納入 **2月会費**　1月25日(水) ～　2月7日(火)
　　3月会費　2月 28日(火) ～　3月7日(火)

・退会締切　2月10日(金)

・シール配券
　『いぐねの庭』　2月 28日(火) ～　3月7日(火)

23 年度 運営担当サークルを調整中です。
決定次第、各サークルにお知らせします。
運営サークルの活動を楽しみ、仲間を増やしていきましょう

★ 例会翌日は、事務局は休みです。

★ 毎月の会費納入は、基本的には
月末の25日～月初め5日 です。
※例会等の関係で変更になることがあります。

★ **例会運営サークルの集い**の日程は、担当の
サークルリーダーにお知らせします。

★ 退会する場合は、**退会締切り日まで**に
手帳裏表紙の**退会届に必要事項を記入**の上、
事務局へ提出して下さい。

※**電話や FAX、郵送での退会受付はできません。**

※入会 1 年未満の方と退会締切り日後の退会は
認められません。ご了承ください。

【事務局からのお願い】

不要になったハガキや切手がございましたら、例会会場、または、事務局にお持ちいただけると大変助かります。それぞれ未使用であればどんなに古いものでも結構です。

富士山演劇鑑賞会
富士市元町 12－26　田中ビル 101 号
TEL 0545-63-9201　FAX 0545-62-1687
Eメール　fj_simingekijou@ab.thn.ne.jp
http://web.thn.jp/ fj_simingekijou/
ホームページ［ 富士山演劇鑑賞会 ］で 検索

観劇のマナーを守って
楽しく「かんげき」しましょう
・携帯電話の電源は切りましょう
・開幕前は静かに待ちましょう
・お話は上演終了後にゆっくりと
・客席での飲食はできません